

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

離れる移動を表す動詞と共起する格助詞「から」の出現について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード: 移動動詞, 位置叙述, 離点, 基準点, 格助詞「から」「より」「を」 作成者: 松本, 昂大 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001693

離れる移動を表す動詞と共起する 格助詞「から」の出現について

松本 昂大

キーワード：移動動詞、位置叙述、離点、基準点、格助詞「から」「より」「を」

はじめに

- (1) のがれがたくていまはと思ふに、年経つる浦を離れなむことあは
れに、…… 20- 源氏1010_00018・②松風 p.401
- (2) 二葉にて母には離れさぶらひぬ。 30- とは1306_02002・p.291

中古、中世では、離れる移動を表す移動動詞の離点標示は主に「を」「に」が担っており、「から」「より」と共起する例はほとんど見られないということが報告されている（松本（2022））。一方、現代語では、「から」と共起する例も見られ、「を」と「から」の使い分けが論じられることも多い（加藤（2013）、三宅（1995, 1996）、杉本（1995, 2014））。本稿では、離れる移動を表す動詞が「から」または「より」を承ける例がいつごろから見られるのか調査し、その出現について通時的に検討を行う。

1. 先行研究

加藤（2013）は場所格の「を」をいわゆる起点用法と解される「離格」と「経路格」に分け、離格について「「離れるという動作において、その動作を行う前に移動主体が存在した場所で、その動作を行うことで離れていく場所」をマークする」（p.226）と述べている。一方、「から」の起点用法については「空間的な基準位置」と解釈できる起点であり、「移動行為の起点でなく

でも発生上の始点や認識上の基準点でもよい」とも述べている (p.227)。さらに、離格の「を」の使用の制約として寺村 (1989)、三宅 (1995, 1996) などの研究を踏まえつつ以下の6つを挙げている (p.220~228)。

- [1] ヲ格は意志的な移動動作でなければならない。
- [2] 着点が同時に示されるとヲは使えない。
- [3] 起点に焦点が置かれる場合ヲは使えない^{注1}。
- [4] マークする名詞句の場所性が不明確であれば、ヲは使えない。
- [5] カラは移動行為でなく消滅事象の場合でも使えるが、ヲは使えない。
- [6] 位置関係の静的な属性叙述にカラは使えるが、ヲは使えない。

上のほかに、「[大学を出る]」は、移動する際の出発にも卒業にも使えるが、「[大学から出る]」は前者にしか使えないなど、意味差が明確になるケース」の存在についても述べている。

現代語研究においては、このような「を」について、起点(離点)と経路、さらには対格との派生関係や共通性が論じられることが多く、「から」は、その比較対象として扱われることが多い。しかし、松本(2022)によると、「から」および「から」と同じく起点を表す用法を持つ「より」が離れる移動を表す動詞と共起する例は中古、中世までにはほとんど見られないということが報告されている。松本(2022)は、「離れる移動を表す動詞」を二つに分け、起点、離点^{注2}の格標示について調査を行っている。「去る」「かる」「遠ざかる」「のがる」「のく」「離る」「別る」の動詞の離点標示は、中古、中世においては、主に「を」もしくは「に」が担っていると述べており、それ以外の格助詞の離点標示は「より」の例が1例が報告されているのみである (p.71)。

では、離点「を」と比較されるような「から」「より」はいつごろから現れるようになるのか。また、現代語の研究で指摘されるような、移動動詞と共起する「から」と「を」の使い分けはその当初から存在していたのか。本稿では、および明治期の雑誌資料を中心に調査し、上記の疑問を明らかにしていく(「より」については特に6節で扱う)。

2. 調査方法

離れる移動を表す移動動詞と「から」「より」が共起した例が、まとまった数見られるようになるのは近代になってからである。調査対象とする動詞は、松本（2022）で扱われた動詞のうち「しりぞく」「遠ざかる」「のがれる」「のく」「離れる」とした^{注3}。用例の採集には国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』を用いた。検索対象は、「明治・大正編 I 雑誌」である^{注4}。検索条件は、語彙素読みをそれぞれ、「シリゾク」「トオザカル」「ノガレル」「ノク」「ハナレル」とし検索。その後、同音異義語、複合動詞を除外した。さらに、翻訳文、韻文、漢籍等の引用であることが明らかなものも除外した。また、離れる移動を表す動詞に係る格助詞「に」「と」や格助詞を伴わない無助詞名詞もある程度の用例数が見られるが、今回は扱わなかった。

3. 「から」が用いられやすい環境

本節では、「から」が用いられやすい環境を探るため、まず、離点を以下のように名詞の性質によって分類する。

3.1. 空間性

(3) 之に連れて捕鯨船も追々近海^を離れて遠洋に出ていくのであるが、
60M 太陽1909_16048 「名詞の瑞典諾威勸 水産立國の瑞典諾威」
松原新之助

(4) ——三年前の夏、江戸^{から}離れて狭山在の大庄屋の神田家へ屏風
と掛物の手入に行つてみたとき、
60M 婦俱1925_03076 「大奥祕話 火に狂ふ女」本田美禪

(3)(4)の「近海」「江戸」のような場所名詞は、空間性が読み取りやすい名詞である（以下では、便宜的に「空間性がある」と称することがある）。離点に立つ場所名詞は、移動主体がその移動を行う前に存在していた場所であることがほとんどである^{注5}。

(5) 黙つてオルガンから離れた彼は、表情の無い、うつそりとした顔を捧げて、
60M 太陽1925_10063「父」加藤武雄

(6) はな子は茂男から離れて亂れた髪をかき上げる。

60M 太陽1917_01037「戯曲 生きんとすれば—二幕—」長田秀雄

一方、(5)(6)の「オルガン」「茂男」などは空間性が読み取りにくい名詞である(同様に「空間性がない」と称することがある)。これらの名詞は、移動主体が存在していた場所ではなく、移動主体が接触または近接していた対象として捉えられる。

また、(3)(4)のような空間性のある名詞はある種の領域を示すため、離れる移動は、その領域から出た時点で完了する。しかし、(5)(6)のように空間性がない名詞はその領域を明確に示すものではなく、物や人からどの程度離れた時点で移動が完了するのかが明確ではない。例えば、接した状態から離れた時点で完了する場合(7)もあれば、ある程度の距離をとることを要する場合(8)もある。また、打消し表現を伴って、接したままの状態(9)や、一定の距離を保った状態(10)を表すこともある。

(7) そして脈を觸れる彼の指が患者の手から離るるや否や、

60M 太陽1925_01087「特志解剖」正木不如丘

(8) 一日の中小しの時間でもよいから周囲の人々から離れて靜かに考へたいといふのであつたので、

60M 太陽1925_03021「我國最初の利益分配制度を實行し、労働問題の解決に一新曙光を點じたる東京電氣會社の功勞株分配」北山々人

(9) 衛者は臀部に跨りてその胃部に兩手を結び、前額が前膊から離れない程度に於いて高く舉げ、上下の運動を繰返すべし。

60M 女世1909_10034「夏の衛生」作者不明

(10) (金星は)始終太陽から多く離れず時としては白晝に見ゆることもある、

60M 太陽1909_04042「季節の話(一月號所載乾坤一轉参照)」寺崎留吉

このように、離点に立つ名詞に空間性が読み取れるかどうかということは、その移動をどう捉えるかということにもかかわる。本稿では、場所名詞を空間性がある名詞に、人や物（非情物のほか、「腕」など有情物の一部も含む）を表す名詞を空間性がない名詞に分類する^{注6}。

3.2. 抽象名詞

抽象名詞には、空間性が読み取りやすいものと読み取りにくいものが混在する。

(11) 強きものに抱擁されて、安心幸福を感じたやうな、過去の女性の道徳から離れて、女性の個性に根ざした獨立的精神を養ひ、

60M 婦俱1925_12008「教育時言」兆水漁史

(12) それ等を私は單に氣分の描寫のみでなく、根柢を少しも寫實から離れないやうにつとめて描いた。

60M 太陽1917_13036「白馬山八題」寺崎広業

(11) (12) の「道徳」や「寫實」は空間性が読み取りにくい。抽象名詞のほとんどは空間性が読み取りにくいもので、ほかに「問題、考へ、法則、生活」などの名詞が挙げられる。

(13) 木村氏、山内氏も總同盟分裂以後は、總同盟を離れて評議會に移り、

60M 太陽1925_13023「勞働總同盟の人々」佐保貞二

(14) 今日現に國政の要路に在る人も其職務を離るれば再び記者として文壇に立たるべき者である。

60M 太陽1909_05053「名士の佛國觀 新聞雜誌記者生活」渋谷馬頭

一方で、(13) の「總同盟」、(14) の「其職務」は、移動の主体がかつて

そこに在籍、在任していたということを含意する。その点では、場所名詞に近く、空間性を読み取りやすい名詞だと言える。本稿では、所属先や職務を表す名詞をまとめて「所属先」と呼ぶことにする。所属先には他にも、「～会、内閣、国家、職、職務、任、任務、現役、位」などの名詞が挙げられる。

次からは、このような観点で分類した離点について、動詞ごとに見ていく。

3.3. 離れる

表1.「離れる」の離点標示

		「離れる」総数：1085		
		を	から	より
空間性あり	場所	195	26	6
	抽象 - 所属先	20		
空間性なし	物	55	16	
	人	26	14	5
抽象		272	40	14

「離れる」は離点の種類を問わず「を」を用いることが多いが、空間性がない名詞を承ける場合について見てみると、「を」と「から」の用例数の差が比較的小さく、「から」は（5）～（10）のように空間性がない名詞を承ける場合に多く用いられるようである。一方、空間性がある語を承ける場合にも「から」の例が見られるが、この例の中には「離れる」に特徴的な用法のものがある。

(15) 『ライ姐エ何所へ行のだ何だか道が違ふやうだぜ』『イイヨ承知だよ』
と家から二三丁も離れたかと思ふ人通りのない所で立止り

60M 太陽1895_10029 「心中女」幸堂得知

(16) 始めブリューチから少し隔れた所へ連れて行かれ塹壕を掘る事を命ぜられたが…

60M 太陽1917_02032 「白耳義占領地に於ける獨逸の奴隷制度」作者不明

(17) ホームは素より驛の建築から離れて、屋根無しで有つた。

「から」が【場所】を承けるものの中には、「ある場所が、別のある場所とどれだけ離れているか」を示す例が多いという特徴があげられる。本稿ではこのような例を「位置叙述」と呼ぶ。先行研究で挙げた加藤（2013）の〔6〕の制約も位置叙述に関する制約と言える。位置叙述は、典型的には、(15)、(16)のように、基準となる場所や物、および数詞や距離の多寡を表す語を伴い、存在詞「いる」「ある」と共起したり、連体修飾節の形で現れたりするが、(17)のように数詞や副詞と共起しない例もある。「位置叙述」は数詞や距離の多寡を表す語の共起は必須ではないが、ある場所や物の位置を表すものであるため、基準となる別の場所、物との共起、含意は必須であると考え^{注7}。

【場所】を承ける例を位置叙述に用いられた例とそれ以外とで分けたものが表2である。

表2. 場所名詞を承ける例に見られる位置叙述の例

	を	から	より
位置叙述	13	20	6
位置叙述でない	182	6	

空間性がある名詞は「を」が用いられることが多いが、表2を見ると、位置叙述の場合には「を」よりも「から」が多く用いられる。位置叙述の際には、場所名詞であっても空間性が捨象され、離点はある場所や物の位置を表すための「基準点」として見なされる。そのため、空間性のない名詞を承ける場合に多い「から」と共起する例が多く見られるのであろう。

このように、「から」は「空間性のない名詞を承ける場合」と「位置叙述を表す場合」に用いられやすいということが言える。

3.4. しりぞく、のく

表3. 「しりぞく^{注8}」の離点標示

		「しりぞく」総数：499		
		を	から	より
空間性あり	場所	28	2	5
	抽象 - 所属先	42	1	7
抽象		4	1	3

表4. 「のく」の離点標示

		「のく」総数：9
		を
空間性あり	場所	2

(18) 当時僕は、既に毎日新聞社^{しりぞ}を退いて居つたのである。

60M 太陽1909_02014 『『明治評論』経営時代の鳥谷部君』山本青城

(19) 伊東社長は、その職^{しりぞ}を退かれた。

60M 太陽1925_01025 「官界から實業界に入りて」白仁武

「しりぞく」は空間性がある名詞を承けることが多い。(18)は【場所】(19)は【所属先】を承けた例であるが、空間性がある名詞を承ける場合は「退職」や「退学」を表す例が目立つ。調査範囲に現れた「しりぞく」は、ある対象から離れるという移動ではなく、存在していた場所からいなくなる移動を表す例のみであった。【場所】【所属先】を承ける例が多く、「から」があまり見られないのもそのためであろう^{注9}。

(20) 宮城は病院^をのいてしまふたとのこと、

60M 女雑1894_42006 「悲劇 魂迷月中双 一名、桂吾良」岩野泡鳴

「のく」は用例数が少なく、「【場所】をのく」という例が2例見られるのみである。空間性のある名詞を承けることが多いという点で、「しりぞく」

との共通性が見られる。

3.5. のがれる

表5. 「のがれる」の離点標示

		「のがれる」総数：340		
		を	から	より
空間性あり	場所	14	1	3
空間性なし	物	5		
	人	1	3	
抽象		51	23	3

(21) 苦痛 から 遁れやう遁れようとする一念より外には何もない。

60M 太陽1909_14030 「一室内」真山青果

(22) 『昨夜はお助け下されまして、お蔭をもちまして危難 を 遁がれ、何んとお禮を申してよいやら。』

60M 太陽1925_11040 「長篇小説 鼬つかひ (第三回)」国枝史郎

「のがれる」は「難」「苦しみ」「災い」「罪」などのような逃れ難い状況を表す名詞や、「法」「責任」などのように移動主体を精神的に拘束するような名詞を承ける例が多く見られる。また、空間性がない名詞については、【人】を承ける例は (23) のように、物理的に離れるのではなく、その人の支配、攻撃からのがれるというような意味に限られ、【物】も (24) のように逃れ難い状況を比喩的に表したものが多い^{注10}。

(23) 人若し劍戟を以て我に迫らば我は走て之 を 遁れん

60M 国民1887_10004 「再び在野の政治家の成敗を度外視するの
勇氣無る可らざる所以を論ず」尾崎行雄

(24) 卿と僕とは假令英軍の彈丸 を のがるるとも。

60M 太陽1895_01014 「ヲートルロー合戦の記」戸川残花

逃れ難い状況を表す名詞は、主体を内包するような状況を表すという点から見れば、空間性を読み取ることができる。一方、場所名詞のような明確な空間性はない。そのため、空間性のある名詞と共起しやすい「を」と空間性のない名詞と共起しやすい「から」のどちらも用いやすかったのであろう。

3.6. 遠ざかる

表6. 「遠ざかる」の離点標示

		「遠ざかる」総数：153		
		を	から	より
空間性あり	場所	3		
	抽象 - 所属先			1
空間性なし	人	3	2	
	物		2	1
抽象		11	16	7

「遠ざかる」は「から」を承げる例が「を」よりも多いという点が特徴的である^{注11}。

(25) その山徑を何處までも歩いて行つた。やがて徑は二つに岐れた。

上りの路を行けば次第に市を遠ざかるのであつた。

60M 太陽1917_08037 「蠢動」村山勇三

(26) 埋葬場は、住家より遠ざかる可く

60M 国民1888_17012 「倫敦府の未來 (二)」作者不明

「遠ざかる」は存在していた場所からいなくなる移動ではなく、ある場所や物から距離を隔てるという移動を表す。(25) (26) の上接語は【場所】ではあるが、これらはすべて移動主体が存在していた場所ではない。表6からもわかる通り、「遠ざかる」は空間性のある語を承げる例が少ない。その点では、空間性のある名詞とよく共起し、「を」を承げる例が多い「しりぞく」「のく」とは対照的であるといえる。

4. 「から」の出現に関する通時的考察

ここまで「から」「を」の用例を中心に見てきた。特に「から」が現れやすい環境としては「空間性のない名詞を承ける場合」と「位置叙述を表す場合」が挙げられる。これら2つを手掛かりに「から」の出現について、通時的に考察する^{注12}。

まず、「離れる」に見られる位置叙述について、近代よりも前にその用法が見られるかどうか確認するため、中古から近世にかけての「離れる」について調査を行う。その結果、位置叙述と言える例は見られなかった。以下の例は、移動を表しておらず、「ところ」「小島」の位置について説明しているようにも見えるが、基準となる場所、物が示されていない。これらは、どこからどの程度離れているかを明示的に示しているわけではなく、話者の認識として、主として自分から遠いところにあるということを言うのみであり、位置叙述ではない。

(27) 家移りとかせらるることありて、われはすこし離れたるところに
渡りぬれば、20- 蜻蛉0974_00004

(28) 何となく賑ははしき宿と見ゆるに、たいか島とて離れたる小島あり。
30- とは1306_05001

位置叙述は近代になってから行われるようになった「離れる」の新しい用法であると言える。

次に、空間性のない名詞を承ける場合に「から」が用いられやすいという点についてである。これについては、離れる移動と共起する空間性のない名詞の種類、数自体が、近代に増えたということが言える。表7は、近世の離れる移動を表す動詞と離点の共起をまとめたものである^{注13}。

表7. 近世における離れる移動を表す動詞の離点標示

	総数			を	に	と	無助詞	係助詞
離れる	114	空間性あり	場所	13			9	3
		空間性なし	人		12	1		
			物	2	2			
		抽象		14	1			
しりぞく	4	空間性あり	場所	3				
のく	89	空間性あり	場所	3				
		空間性なし	人		1			
		抽象		1				
のがれる	84	空間性あり	場所	8				1
		抽象		12		4	8	
遠ざかる	22	空間性あり	場所					1
		空間性なし	人		2			
		抽象			1			

近世には「から」「より」は用いられず、「を」は【場所】【抽象】、「に」は【人】を承ける例が多いという傾向が見られる^{註14}。

(29) 生国は大和田原本幼少で二親[□]に離れ、今は在所の兄よりほか一門眷属一人もなし
51- 近松1709_17003 「心中刃は氷の朔日」

(30) お里[□]にも離れてやもめの身

53- 人情1823_08007 「明烏後の正夢」 滝亭鯉丈、為永春水

(31) 旦那衆の腰[□]を離れぬこの鍵を盗み出し、

51- 近松1711_18002 「今宮の心中」

(32) 平兵衛、至極に詰れども、懐の金[□]に離れ難く

51- 近松1709_17001 「心中刃は氷の朔日」

【人】を承ける場合、近代には、(6)のように単に物理的に離れる移動を表す例も見られたが、近世では(29)(30)のように、親、兄弟、恋人との死別や別離を表す例に限られる。【物】を承ける例は【人】よりも少なく、「を離れる」に2例、「に離れる」に2例見られた。特に「に離れる」は、(32)

のように「金」を擬人的に捉えている例であり、もう1例も「杖（頼りにする人の意）にはなれし今のかなしみ」といった比喩的な表現であった。このように、空間性がない名詞の例は近世に少なく、近代になってから「離れる」「遠ざかる」など、ある場所や物との距離の隔たりを表す移動動詞と共起する例が増えたということがわかる。

近代に増加した「空間性のない名詞を承ける場合」と「位置叙述を表す場合」という2つの環境に共通するのは、離点を「基準点」として捉えるというところにある。基準点を標示する手段として「を」ではなく「から」がより多く選択された理由について、「から」にはもともと、(33) (34) のように、場所を基準点と見なして標示する用法があったからだと考えられる。(33) (34) の「から」は、「まで」と共起し、ある範囲の開始地点を表している。「から」「まで」によって示された範囲には空間性が読み取れるものの、開始地点、終了地点は点的な基準と解され、それ自体に空間性は読み取りにくい。

(33) 遠国近国の貴賤上下山々寺々から老少来集まり、鳥羽の南の門
から四塚まで満ち満ちたれば、

40- 天平1592_04020 「天草版平家物語」

(34) もとより金貨を造り商賣を盛にして黒海邊から地中海邊
まで八十餘ヶ所も植民地を開くゝなれば諸物の流通も廣大なり

60M 明六1875_34001 「想像鎖国説（明治八年三月十六日演説）」 杉亨二

離点が基準点として捉えられる場合、離れる移動を表す動詞は、ある場所や物からの距離を表す述語として働く。実際に「から」が用いられた(7)～(10)では、離点は様々な距離感を表すための基準点となっている。

5. 現代語の制約の通時的解釈

「から」が用いられやすい2つの環境について、「空間性のない名詞を承ける場合」は加藤（2013）で示された制約の[4]（マークする名詞句の場所性が不明確であれば、ヲは使えない。）に関わり、「位置叙述を表す場合」は

制約の [6] (位置関係の静的な属性叙述にカラは使えるが、ヲは使えない) に関わる^{注15}。制約の [4] は、加藤 (2013) が「テレビ {*/を/から} 離れなさい」「テレビの前 {を/から} 離れなさい」といった例を挙げ、「語用論的にヲでマークする名詞が場所・位置と解釈できると需要度は上がる」と述べている (p.226) ように、空間性がない名詞と「を」が共起できないということである。

今回調査した近代の用例の中には、このような環境においても、「から」ではなく「を」が用いられた例も複数見られた。

(35) 女史は今しも一人のお弟子に稽古遊して御出での處でしたが、静かにピアノ^をはなれて手づから友禪縮緬の座蒲團をすすめて下さいました。 60M 女世1909_05010「音楽の名手 藤井環女史」三浦環

(36) 處は京都^を南に四里はなれた町でありました、

60M 女世1909_10018「今の世に珍らしい古風な家庭」花売女

近世までは「から」「より」が現れないことと、(35) (36) のような用例の存在を考えると、近代においては、[4] [6] は、「を」が使えないという「制約」ではなく、「から」が使いやすいという「傾向」として見る事ができる。

その一方で、「から」が空間性のある名詞を承ける例もわずかながら見られる。

(37) 彼女は幾らか自分が見られてるのを感じ乍ら、出来るだけ恭しく焼香した。而してそこ^{から}退いて、

60M 太陽1917_10040「感謝」久米正雄

「から」は、「空間性のない名詞を承ける場合」と「位置叙述を表す場合」という環境での出現を端緒に、空間性のある名詞を承けるほどに勢力を拡大させ、やがては [4] [6] の制約のように「を」よりも広い範囲を承ける

ようになったと考えることができる。

6. 「より」

「より」については、「から」の口語的表現とされることが多い(松下(1928) p.476、湯沢(1959) p.492)。実際に、「から」が用いられやすい空間性のない名詞を承ける場合および、位置叙述を表す場合には「より」も用いられる。

(38) 日本は、到底、正義より離るべからず。

60M 女雑1894_36001 「世界の日本、及び其抱負」 巖本善治

(39) 三峰山より二里ばかり隔れる大日向山上に、大陽寺といふ禪寺あり。

60M 太陽1909_01031 「冬の旅」 大町桂月

構文的には、用いられやすい環境に大きな違いはないものの、現れる資料には異なりが見られる。以下の表8では、雑誌とその発行年ごとに、3節で扱ってきた離れる移動を表わす動詞と共起する「から」「より」「を」の用例数をまとめ、コーパスによって付与される「口語」「文語」のタグによって分類を行った。

表8. 離れる移動を表す動詞と共起する「から」「より」「を」の
文体ごとの出現数（近代）

		口語			文語		
		から	より	を	から	より	を
明六雑誌	1874-75						10
東洋学芸	1881-82						8
国民之友	1887-88			1		7	44
女学雑誌	1894-95			2		10	49
太陽	1895		1	8	1	9	131
	1901	2		23		4	77
	1909	16	1	75		8	43
女学世界	1909	9	5	37		1	3
太陽	1917	34	4	97		1	8
	1925	57	3	89			3
婦人倶楽部	1925	28	1	24			

「から」は文語に1例しか現れず、口語に偏って出現していることがわかる。また、口語においては1917年以降特に用例数を増やしている。一方、「より」は口語にもわずかに表れるが、文語に偏りが見られる。文語においても『太陽』（1895）の中ですでに使用割合が低く、その後も「を」を凌駕することはなかった。『太陽』については、田中（2013）が「最初の年である一八九五（明治二八）年では文語記事が圧倒的多数を占めていましたが、次第に文語記事の比率は減少し、変わって口語記事の比率が上昇していき、最後の年である一九二五（大正一四）年では口語記事がほぼすべてを占めるようになった」（p.24）と述べており、「より」の出現、衰退と「から」の出現、拡大は、文体の観点から説明することができる。

おわりに

本稿では、離れる移動を表す動詞の離点標示について見てきた。離れる移動を表す動詞の離点標示は近世まで主に「を」が担っていたが、近世に入ると「から」が基準点標示として、空間性の読み取りにくい名詞を承ける場合

や位置叙述を表す場合の中で用例数を増やし、ある場所、物との距離を表す動詞（「離れる」「遠ざかる」）との共起が多く見られるようになった。また、用例数は少ないが、空間性の読み取りやすい名詞を承ける例もあることから、近代は、「から」が「を」の領域に進出し、さらに現代語で言われるような「制約」にまで「を」を追い込み、勢力を拡大させる過渡期と見ることができる。

ところで、「から」「より」に関しては、(40) (41) のような例が見られる。(40) (41) は、「離れる」という動詞はないものの、(15)～(17) と同じような位置叙述を表している。

(40) 萩から四里許りの上流に、近來、發見された長門峽の絶勝がある。
60M 太陽1925_05054 「維新志士を輩出せしめたる萩の雰圍氣」横山健堂
(41) 「トンネル」は全く此四層の馬鞍形を貫き採炭する見込なりしが、
本年三月一日に於て、漸く坑口より九百二十七尺なる第一層に達した
るに、
60M 東洋1882_08010 「〔雜報〕」河野鯨雄

これらは、動詞の省略と見るべきか、あるいは「から」「より」単独で位置叙述が可能であるのか。今後は、このような位置叙述をはじめとする基準点の標示について、本稿で扱えなかった「に」「と」も含めて、さらなる調査を行いたい。

注1 加藤 (2013) は [3] について「これは、「代替物やほかの選択肢が想定できないとカラは使えない」という制約と考えるべきだと思われる」と述べている。

注2 本稿では松本 (2022) による提案 (p.80) に随い「離れる移動」の離れ先を「離点」とし、それ以外の移動動詞の移動の開始地点である「起点」と分けて考える。

注3 松本 (2022) で扱われた動詞のうち、「去る」は自他同形であり、自他の判断が難しいため、「別れる」は「を」「から」などの共起が見られるが、「と」との共起が多く、格標示の全体像を把握しきれないため、「かる」は用例が見られないため、それぞれ対象外とした。

注4 対象作品は以下の通り。明治・大正編 I 雑誌 (明六雑誌 (1874, 1875)、東洋学芸雑誌 (1881, 1882)、国民之友 (1887, 1888)、女学雑誌 (1894, 1895)、太陽 (1895, 1901, 1909, 1917, 1925)、女学世界 (1909)、婦人倶楽部 (1925))

注5 例(25)(26)のように、場所名詞が移動主体が存在していた場所でない場合もあるが、わずかである。

注6 動物など、人以外の有情物は、有情／無情の把握の仕方が文脈によって異なるため、扱わなかった。

注7 位置叙述は他にも【人】を承ける場合に1例、【物】を承ける場合に2例見られた。
電が閃めくたびに、彼の小さな體は私から五六尺離れた眼の前に浮き出て見えた。

60M 太陽1917_12049 「なぜ母を呼ぶ」小川未明

注8 「しりぞく」「のく」はともに、漢字「退」「却」「除」「斥」などで表記されることがあるが、読みの判断はコーパスに随った。

注9 「から」と比較して「より」が若干多い理由は、「しりぞく」自体に文語的な響きがあるためであろう。「しりぞく」全体の用例数を見ても文語334例、口語165例と文語に偏りが見られる。「から」「より」の文体差については、6節で検討する。

注10 そのほか、空間性がない名詞として「雨」や火事の「烟」などの自然現象を承ける例も見られる。

注11 本稿では「に」は扱わないが、「遠ざかる」は「に」を承ける例も多く見られる。

注12 調査方法は第2節に準じる。調査対象は以下の通りである。

平安時代編Ⅰ 仮名文学（古今和歌集、土佐日記、竹取物語、伊勢物語、落窪物語、大和物語、枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、平中物語、堤中納言物語、更級日記、讃岐典侍日記、蜻蛉日記、大鏡）

鎌倉時代編Ⅰ 説話・随筆（宇治拾遺物語、十訓抄、方丈記、徒然草）

鎌倉時代編Ⅱ 日記・紀行（海道記、建礼門院右京大夫集、東関紀行、十六夜日記、とはすがたり）

室町時代編Ⅰ 狂言（虎明本狂言集）

室町時代編Ⅱ キリシタン資料（天草版平家物語、天草版伊曾保物語）

江戸時代編Ⅰ 洒落本（聖遊廓、月花余情、新月花余情、陽台遺編・艸閣秘言、異本郭中奇譚、短華薬葉、北華通情、南遊記、当世粹の曙、色深狹睡夢、原柳巷花語、無論里問答、風流裸人形、青楼阿蘭陀鏡、昇平楽、当世嘘之川、竊潜妻、誰が面影、河東方言箱まくら、興斗月、郭中奇譚、俠者方言、南閨雑話、甲斐新話、当世左様候、深川新話、総籬、仕懸文庫、花街鑑、花街寿々女）

江戸時代編Ⅱ 人情本（比翼連理花洒志満台、春色梅見与美、おくみ惣次郎春色江戸紫、梅暦余興春色辰巳園、小金五郎仮名文章娘節用、浮世新形恋の花染、春色連理の梅、浦里時次郎明鳥後の正夢）

江戸時代編Ⅲ 近松浄瑠璃（曾根崎心中、薩摩歌、心中二枚絵草紙、卯月紅葉、五十年忌歌念仏、丹波与作待夜のこむろぶし、卯月の潤色、心中重井筒、堀川波鼓、淀鯉出

世滝徳、心中刃は氷の朔日、心中万年草、冥途の飛脚、今宮の心中、夕霧阿波鳴渡、長町女腹切、生玉心中、大経師昔暦、鑑の権三重帷子、博多小女郎波枕、山崎与次兵衛寿の門松、心中天の網島、女殺油地獄、心中宵庚申)

江戸時代編Ⅳ随筆・紀行(鹿島詣、野ざらし紀行、更科紀行、笈の小文、嵯峨日記、おくのほそ道)

注13 調査方法は第2節に準じ、注12に挙げた「江戸時代編Ⅰ洒落本、Ⅱ人情本、Ⅲ近松浄瑠璃、Ⅳ随筆・紀行」の資料を検索した。

注14 松本(2022)は「別る」「離る」に係る「を」「に」の使い分けについて、中世以降、「に」の場合は人、「を」はそれ以外の場所、物、概念を承けるというように、上接語によって区別されるようになった」(p.73)と述べているが、近世もその傾向を引き継いでいると言える。また本稿では扱わなかったが、近代の例にも「人に／と離れる」という例が見られる。

注15 制約の[1]は加藤(2013)も「思いがけない移動も表せ、擬人化も許す」と述べており、意思性については自省が利かないため、扱わなかった。[2][3]は、離れる移動を表す動詞は着点と共起する例や移動の開始地点に焦点(選択性)がある例が少なく、また[5]の消滅を表す動詞は対象としていないため、本稿の調査対象との関連は薄い。

参考文献

- 加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性」『北海道大学文学研究科紀要』118
加藤(2013)所収
- 加藤重広(2013)『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 国立国語研究所(2022)『日本語歴史コーパス』<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>
(2022年1月1日確認)
- 此島正年(1973)『国語助詞の研究 助詞史素描』桜楓社(初版は(1966))
- 杉本武(1995)「移動格の「を」について」『日本語研究』15、東京都立大学
- 杉本武(2014)『日本語文法事典』日本語文法学会編、大修館書店
- 田中牧郎(2013)『そうだったんだ! 日本語 近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店
- 寺村秀夫(1989)「意味研究メモ その1」『阪大日本語研究』1 大阪大学文学部日本学科(言語系)
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社
- 松本昂大(2016)「古代語の移動動詞と「起点」「経路」—今昔物語集の「より」「を」—」『日本語の研究』12-4
- 松本昂大(2020)「中古和文における移動動詞の経路、移動領域の標示」『日本語の研究』

- 松本昂大（2022）「中古中世和文における離れる移動を表す動詞の起点、離点の標示」
『国語研究』85、國學院大學国語研究会
- 三宅知宏（1995）「ヲとカラ——起点の格標示——」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義
表現の文法（上）』くろしお出版
- 三宅知宏（1996）「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110
三宅（2011）所収
- 三宅知宏（2011）『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 湯沢幸吉郎（1959）『文語文法詳説』右文書院